

達候處、今程老衰候得共、尊命の儀に候條畏入候。二十一日可有參扣旨申來候。二十一日朝惟足參上、於大書院溜御對面、於此所御料理出、已後刻於小書院神代卷講釋御聞被成候。時云々の所まで次に翁の切紙御傳授也。於御勝手因幡・筑後・備前・信濃・勘解由其外頭分、望の者は罷出聽聞仕候。但御前伺公無之、八時相濟。

一、日本書紀の義解

やまと。やは天地開けし時の聲、まとは端的の意。書紀。ふみとは萬事をふくみと云儀也。古は物の過去たること也。依之東西南北の儀あり。東はひあかしと云儀、南は日南にのぼりて萬物皆見ゆると云儀、西は日入ていりにしと云儀、北は廻て一陽來復のきたると云儀。時と云こと萬事の工夫ある所也。日本紀三十卷は三十日にかたどり、此内神代卷二卷は天地、外二十八卷は二十八宿に象る也。

一、聖堂へ書冊獻上

今朝聖堂へ太平御覽二笈・太平廣記一笈御獻上。御使番井上三太夫持參、於御高門内菊池新三郎・中村新兵衛へ渡之。一、菊を詠す

九月十四日。  
松かけやみぎりの菊におく露はおいせぬ秋の光なるらん君がため秋なき先に咲初て千とせをかをる菊のしらつゆ  
一、菊池武康と贈答の歌  
二十七日。

長月の月もろともむさし野の尾花分けゆく秋のたび人前裁の菊のいまだ盛なりけるをみて、むすび付侍りける。

秋もまた暮行くものをたがためにまだ咲残る庭の白ぎく

武康のがり申遣ける

秋の夜の長きを侘し旅寝さへ馴ていまはの名残をぞ思ふ故郷の軒端の草はしげくとも忍ぶに堪へじ武藏野のつき軒端の草にかけて、武藏野の月をおもひ、旅ねのうさを忘れて、秋の別れをあはれみ、園の菊に結びて露のことの葉を、残し給ふ御情のあはれさに堪へず、御返しとはなくて、かたはなることの葉を書送り奉るも、且はあやしき也。

故郷に思ひ出なば武藏野の月のゆかりとなりもこそせめあまりに別れのせつなるまゝに。

行人もとまらぬ秋も諸ともに別れて残る身をいかにせん

一、下道中歌日記

やつがれ此曉方、先づ公館に參仕、御出まで勤め御發興の後、直に旅だち侍るなり。平尾の御亭におはしましける程、かしこより御先へかけぬけ侍るなり。板橋の里をいてどうちわたすながめ、目もはるけき也。大かたは青葉まじらぬ芦などの雨に打そよぎ、水鳥のおほくあつまり、たづのあさるもいとけしきめきたり。

二十八日。

袖さむき尾花がすゑの秋風にあめきほひくる武藏野の原桶川の公館にて、木葉の無隙散積るを見て。

木の葉ちる音にしほるゝ旅衣時雨むなしき昨日今日かな深谷の里を出て、小出川を渡りて行くに、西の山の端に日は落ち暮わたりたるに、をちの山の端のかさなりたる氣色、いとをかしかりしに、後より竹田忠張鶴を案じて、遠近人の見やはとがめぬと聞えけるにてみれば、淺間の嶽のはるかに烟うちなびくを見て。

をちかたの空にぞしたふ淺間山この夕かけにたてる煙をおもかけにたつや淺間の夕煙又いく秋をかけてしのばん

二十九日。松枝の驛を経て行くに、漸く日も暮かゝり、片山陰の村里の、柴屋ひま／＼染つくしたる梢ども、いとをかしげなるに、鶉のあさりするも又をかしくて。

あさりして賜も鳴なり山風に木の葉かつ散るさとの夕暮けふは九月盡なれば、又かくこそ

暮て行秋は何處に歸らんみて代ならばいざといはましいとせめて秋の形見に紅葉をばちらさで残せ四方の山風碓氷の關にさしかゝるほど。

暮て行く秋もろ共にとゝめなば、關のこなたに草枕せん坂本の驛に着て、いたくさむかりければ柴折りくぶると。

深山路の露の下柴いつ刈てこよひ旅ねのたつきとはなる十月朔。曉坂本をいでゝ歩にて峠を越す。明方茶店において東方を眺望、下野・常陸をかけて見渡さるゝ也。いくへともなき山の端に、横雲引わたり、次第にしらみゆく氣色いはむ方なし。

紅の雲のころもにうつろひて朝日いさよふをちの山の端深山路に旅ならで見ばいかならん柴の戸ぼその曙のそら